
アンドロイド

スイッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANDROID

【著者】

スイッチ

【あらすじ】

ボクはANDROIDです。

ボクはアンドロイドです。
ボクは人ではありません。
ボクは人のために働きます。

ボクはアンドロイドです。

博士の元で作られ、博士の命令により人と交わって暮らしています。

見た目は人と変わりませんから、人混みに紛れたボクがアンドロイドだとわかる人はいないでしょう。

それほど精密に作られているのです。

人間としてのボクは中島史郎なかじましろうという名の一十一歳男性です。

毎日博士が用意してくれたマンションの一室から、スーツを来て出勤します。

朝食にはこんがり焼き田の付いたトーストとサラダ、それにコーヒーを飲みます。

ボクの体は生き物同様、食物から栄養をとることが可能なのです。アンドロイドがどれほど人間に近付くことが出来るのか。博士はそれが知りたいようでした。

博士のいる白い建物の前を通り、明日はメンテナンスの日だなんて考えながらボクは会社へ向かいます。交差点を曲がった直後でした。

気付くとボクの体は宙へ放り出されました。

横倒しの視界で、車が走っていく様子が見えます。恐らくボクは

歩いていて轢かれてしまったのでしょうか。

ボクはアンドロイドです。

ボクは作り物です。

少し壊れてしまつかも知れませんが、壊れたら修理すればいいのです。

轢かれたまま動かないボクに、スーツ姿の人達が集まつてきて、僕を中心に輪を作りました。

ざわざわする中で、ボクの中身が道路に零れていきました。赤いオイルが排水溝へ流れていきます。

作り物でも走馬灯は見えるのでしょうか。

博士と出会つてからのことが瞬き、博士と出会つ前を思い出していました。

ボクはアンドロイドです。

ボクはとんでもない勘違いをしていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2363k/>

アンドロイド

2011年1月15日20時27分発行